

【加藤信朗著『アウグスティヌス〈告白録〉講義』書評会記録】

加藤信朗『アウグスティヌス〈告白録〉講義』合評会

加藤 武

加藤信朗先生（以下敬称を略）の『アウグスティヌス〈告白録〉講義』が刊行された。あとがきによると、この講義は著者の所屬する東京のカトリック松原教会の信徒にむけて語られたものである。

先般、教父研究会において、このたびのモニュメンタルな書物の誕生を祝い、次の三つの発題にもとづいて討議するときをもった。

1 荒井洋一の発題

『告白録』冒頭の、対話的な関係は、実は、その力動性に関しては、「私」の出現へと向かってゆくのでは

ないだろうか。（荒井洋一）

加藤信朗はなんと『講義』の全十五章のうちの三分の一を『告白』第一巻から第四章までにあてる。荒井洋一も『告白』全体を貫く流れの源流を『告白』冒頭の対話関係に見ている。荒井は加藤信朗の問題提起を、冒頭において「神」というキーワードが現れないことに見る。あなたから神への迂回をへて「わたし」が現れる。わたし自身があるななにとつて何か、の問いに答えようとするところから第九巻までの、「いわゆる自伝的部分」がはじまるという。このふたりの間に流れるものは、ロゴス的な対話というよりも合奏の妙なる交響に似ている。

2 水落健治の問い

1 『告白』を外から見ることも必要ではないか。

2 加藤信朗は『告白』第十巻のメモリア論は、西欧的な神の本質論ではなくて、神の場所論であるとしたり。これは一九七七年ボンでの国際中世哲学会において発表された。これは世界的な意義をもつ。筆者が後にオックスフォードでこれにたいするウイとノンをとったとき、神の場所論に全面的な支持を表明したのはイザベル・ボシエであった。水落は西田の場所論が静的であるのに、アウグスティヌスのそれは動的自己超越であると見るが、どうか。

3 『Interrogatio mea intentio mea et responsio eorum species eorum』.

Confessiones, x, 6, 9

「私の問いは私の注視であり、彼らの答えは彼らの姿です」
(水落健治訳)

「私の問いは私の視向、彼らの答えは彼らのかたちの美しさだった」
『講義』二九一頁

species を水落健治は「すがた」ととり、加藤信朗は、プラトンやプロティノスの *pulchritudo* の理論とつながる文脈で「うつくしいかたち」とみる。『講義』二九六頁

水落はこれを『キリスト教の教え』第二巻のしるしに結びつける。

3 久米博ーリクールの意見

リクールは『記憶・歴史・忘却』(久米博訳、下、第三部・第三章、忘却、二二四頁)においていう。

記憶力を、想起が蓄積されている「広大な宮殿」や「倉庫」にたとえているアウグスティヌスの『告白』において、場所の強力なイメージは文字通りわれわれを魅了する。

その少し前(二三三頁)でいう。

だが、どこに？ その質問こそ畏である。

リクールはこの〈どこに〉の問いの誘惑を回避するために、アウグスティヌスをいったん離れ、ベルクソンのもとに赴いていう。

まさに彼(ベルクソン)の企てのすべては、〈どこに〉の問いを(へいかにして?)の問いに置き換えることにあったのではないか(『講義』二二三頁)。

つまりリクールは記憶の潜在状態から現働状態への移行によって生じる再発見つまり再認に置き換える。

4 筆者のコメント

1 加藤信朗は、楽譜を前にした指揮者、台本を手にした俳優のように、テキストを読んでいる。これはあたりまえのようで、あたりまえでない。

2 『告白』は伝記か。著者は心理的な読み方をしりぞけて、構成的に読む。

この構成的解釈によると、回心の過程は神から離れてゆく〈離向 *auersio*〉と〈帰向 *conuersio*〉の過程から成る（八九頁）。

これはするどい切り口を示す。加藤信朗は「これは『告白録』が自伝文学ではないことを示す」（九〇頁）とはっきりべている。それなのに、最初の九巻を〈自伝的部分〉（八八、八九、一三二頁）と呼んでいる。いささかまぎらわしいではないか。荒井はいう。

ここでは、ひとまず、水平的な川のイメージについては、その片鱗もあらわれない。視界に映るのは、〈あなた〉と〈私〉〈私たち〉との垂直的な、対話的、応答的な関係のみである。

とはいえ断定をやわらげて「もちろん、そこに時間性がないとまでは言えないだろう」といいそえる。

筆者は『告白』の次のうつくしい一節を想起する。

《Sero te amavi,pulchritudo tam antiquae tam nova, sero te amavi.》*Confessiones*, X, 27, 38

荒井も指摘する *amavi* という現在完了形に加えて、*sero* という副詞表現の哀切な旋律にも似た反復に、時間の流れの中に生きる感覚を読みとることができるとではないか。

筆者も自叙伝説にくみするものではないが、自叙伝説を否定するのは容易でない。リクールはこの同じ一節を言い換える。（『記憶・歴史・忘却』第三部・第三章、久米博訳、下巻 二一八頁）

おお真理よ。遅かりしかな。私はお前を再認するのが遅きに失した。

《Tard je t'ai reconnue, ô vérité》(557).

久米博によると、リクールはあえて美を真理と言い換えたのである。たんなる誤解であろうか。いや、それは挑戦的な読み替えを意味する。再認 (*reconnaitre*) とは、あなたをもう一度あなたとして認めること (*conoscere*) を意味するのであってみれば、この解釈は、新たな重みを帯びるのではないか。